

第1回大賞(金の星賞)受賞作品

「千潟の夜に」

千葉県立千葉高等学校三年 方丈真菜美



賢治のまちから
高校生★童話大賞



『干潟の夜に』

千葉県立千葉高等学校三年 方丈真菜美

——僕がまだ子供だった頃の、ある秋の日の話です——

……ざあっん…… ざざあんつ……

僕が気づくと、なんだかたくさん人の頭が僕を覗きこんでいました。

「おや、気づいたね」

中の一番僕の近くにいた女の人気が、につこりと笑いました。

その後ろで僕より小さい、たくさんの子供達が「気づいたって」「よかつたね」と口々に言い合っていました。

僕はその人達を知らなかつたし、何で自分が寝ていたのかわからず、ぼうつとしていました。だんだん意識がはつきりしてくると、

今は夜で、そこがどうやら家の外らしい事がわかつてきました。僕の目の前には、一面の降るような星空が横たわっていたのです。

「起きられる?」女人人が尋ねたので、軽く頷くと僕は体を起こしました。



そして僕はびっくりしてしまいました。僕の目の前には、家も店も何もなくて、黒い地面がずっとずっと広がっていたのです。そんな僕に吹き付けた風は、塩つ辛い海の匂いがしました。

「ここ、どこ?」

僕は不安げに女人に尋ねました。女人人は、ああ、と言うと「干潟(ひがた)だよ」と答えてくれました。

ひがた。その言葉で僕は思い出しました。僕はお父さんとお母さんと、今日は海に遊びに来ていたのです。肌寒い風が吹き付ける中で、確かに父さんがそんな言葉を言っていた気がします。そういうば、遠くの方から海のざあんつという音が聞こえますし、今まで眠っていたのも、ねつちよりとした泥の上だつたようです。

僕が顔をしかめたのがわかつたのでしょうか、女人人が笑いました。「あんた、そういうえば昼間も、汚い、よごれるつて干潟で遊ぼうとしなかつたよね」

「何で知ってるの?」

確かに僕は干潟には入りたくなかったし、実は海にも來たくはなかつたのです。それでお父さんと喧嘩(けんか)になつたのですが。僕はテレビゲームをしている方がずっといいに決まっていると思つ



ていました。

「何でって。私たちの上であんな大きな声で喧嘩されたらねえ。誰でも知っているよ」

女の人は僕が立つのを助けながら言いました。子供達がくすくすと笑いながら僕たちの周りをぴょんぴょんはねていました。

「私たちの上?」どういうことだろう。

「そうそう。私はアサリだからね」女のはどこか誇らしげに言いました。

「アサリ?うそだあ。だつてアサリは貝でしよう?」

アサリぐらいなら僕も知っています。大嫌いなみそ汁の具の一つでしたから。でも女人人は別に気にしていないようでした。

「そうだよ。でも今日は特別さ。お祭りの日だからね。みんなうんとおめかしするんだよ」

「お祭り?」こんな泥だらけの場所で何を言っているのかと僕が思うと、子供達が嬉しそうに僕の前にやつてきました。

「そうだよ。お祭りなんだ」「今日は特別なんだよ」「今日はねえ、

秋の大潮(だいおおしお)の日なんだよ」「一年に一度なんだよつ」「楽しみ!」「楽しみ!」



『ねえ、お兄ちゃんも行こうよ！』

声を揃(そろ)えて言われて、僕は思わず頷いていました。子供達は喜んだようにぴょんぴょんはねると、僕の腕を取つて走り出しました。

引っぱられて、潮風に煽(あお)られながら夜の干潟を走つていくと、白い火で明るく照らされた場所が見えてきました。遠目にも、そこにたくさん的人がいるのが見えて、夜の音と共に楽しそうな笑い声や歌声が響いてきました。

「お祭り、お祭り！」子供達は走るたびに足元で鳴るぴちゃぴちゃという音も嬉しいらしく、軽い足取りで踊るように駆けていました。僕はなんだか楽しい気持ちになつて、明るい場所に向かつて子供達と競争するように走りました。

明るい場所にはとてもたくさん的人がいました。暗く静かな夜の干潟の中で、そこだけが街のように賑(にぎ)やかでした。

地面のあちこちには、篝火(かがりび)のよう、真っ白な炎のようなものが立ち上がりついて、しかも不思議と、その炎は近づいても熱くありません。色々な人がその炎の周りで、話したり、飲み物を飲んだりしているようでした。

「あら、アサリさん。素敵な服ですねえ」

後ろを追いかけてきたアサリさんが、別の女人の人に呼び止められました。

「あらまあ、あなたの方こそ素敵よ、アサリさん」

僕には、白い生地に茶色や黒の模様の入った二人の服は全く同じに見えたけれど、一人は「ここ」の横ジマガ」「ここ」の小さな点が」だとほめ合っています。それより僕は、どちらもアサリだなんてややこしいなと思つていました。

僕は、さらにハマグリさんまで加わつて話しこんでいるアサリさんをおいて、やはり白い生地に茶色の模様の服を着た子供達と先に進みました。

「ねえ。あの人達はどうして光っているの？」

僕が指さす先には、二人の男の人が座っていました。ひょろりとした男の人の話を、まるいでつぶりした男の人が真剣に聞いています。そして驚いた事に、彼らの体が青く光を放っていたのです。ふと気づくと、あちこちに彼らと同じように体を光らせている人がいました。その人たちがヒラリと動くたびに、黒い影が舞い、青い残光がゆれて、まるで海中の魚になつたような奇妙な気分になりました。





た。

「どうしてって、ホタルイカさんとヤコウチユウさんじやない」「そうだよ。当たり前だよ」「光らなきや変だよ」「あっちのウミホタルさんもきれいだよ」

子供達からたくさんの中返事が返ってきました。僕は言われた名前を知らなかつたけれど、ぼうつとやさしく光るその青い光は本当にきれいだったので、「そうだね」と笑いました。

その時、集まりの真ん中あたりで、わあつという声があがりました。

「あつ！ダンスがはじまつたよ！」「本当だ。早くおどろう！」

子供が嬉しそうにその場でくるりと回ると、僕の腕を再びつかみました。

「行こう、おにいちやん！」

「うん」

僕は子供としつかり手をつないで、みんなが作り始めた輪つかの中へと走つていきました。

人の作った輪の真ん中では、大きな白い炎が渦巻くように燃えていました。さらにその周りには、さつきのような体の光る人達が両



手をつないで、小さな輪を作りながら踊つていて、キヤンプファイアーのようです。他の人達はその周りで、歌つたり、踊つたり、手を叩いたりしていました。

その中でもとても大きなきれいな音で、パチンパチンと手を叩くおじいさんがいて、「テツポウエビさんだよ」と子供が教えてくれました。

他にも、くるくるとコマのように回り続けるバイガイさんや、カツーンカツーンと、体をおはじきのように互いにぶつからせながら踊るイボキサゴさん、赤い舌を出してみんなをからかって歩くバカガイさんなど、とても色々な人たちがいました。

そして、人垣が割れて、こげ茶色の服を着た人達が一列になつて真ん中に出でくると、大きな声と拍手が起こりました。となりでは子供達もぱちぱちと手を叩いています。

「すごい。チゴガニさんたちだ」「やつたね。チゴガニさんたちのダンスが見れるよ!」興奮したようにみんなが見て、手を叩く中で、チゴガニさん達は踊り始めました。みんなでぴつたりそろつた動きだつたり、少しづつずらしたり。肩から先の袖だけが白いので、チゴガニさん達が両手を上げ下げるたびに小さな波が目の前に現れ

たようで、僕は見とれていきました。

そのうち盛り上がり上がつてくると、みんな踊りの輪に加わりだし、手を叩き、歌いながらくるくると手を取り合ってステップを踏み出しました。

「踊ろう、踊ろう」「今日はお祭り」「一年に一度」「踊ろう、踊ろう」「楽しく踊ろう」「大大潮(だいおおしお)の日」「大大潮(だいおおしお)の日」「踊ろう、みんなで楽しく踊ろう！」

『ねえ、お兄ちゃんもおどろうよっ！』

嬉しそうに回る子供の手を、僕はがつちりとつかみ、「うん、おどろうっ！」満面の笑顔で答えました。

まわる、まわる。みんなで回る。

笑顔、歌声、叫びに拍手。

まわる、まわる。みんなで回ろう。

白い炎におどる影。

潮(しお)の香(か)、干渴に星の声。

手を叩こう。足を鳴らそう。

火照(ほて)る頬を蘿(な)ぐ夜風。



青い光に映りこむ、姿はまるで万華鏡。

楽しい、楽しい。笑いの輪つか。

おどろうよ。歌おうよ。

だつて今日は祭りの日。

一年に一度の祭りの日。

秋の大潮の日なんだから。

楽しもう。そして迎えよう。

新しいのちが灯る時を……。

大いに盛り上がっていた人々が、すっと潮が引くように、ひとり、またひとりと、海を、空を見ながら踊りをやめていきました。いつの間にか歌声も途切れ、みんなが真剣な目で、はるか遠くにある海岸線の方を見つめるようになりました。地面から昇る白い炎もいつの間にか消え去って、夜の中、ただただ、青い、青い光が、うすくみんなの顔を照らすだけでした。

とても楽しくおどつていた僕は戸惑つてしましました。そして、横にいた、始めのアサリさんにそつと聞いてみました。

「どうしたの、みんな？」



「お祭りだからだよ」

アサリさんの答えは全くわかりませんでした。首をひねりつつも、みんながその場に座り込み出したので、僕もぺたりと座りました。すると、それまで忘れていた潮騒が、静かに僕の耳を洗つていきました。

……ざあん…… ざあん……

ふと、空を仰ぐと、黒い空と銀の星々の佇(たたず)む天球の底に、満月が懸かっているのに気づきました。ゆっくりと降りて来たような、やわらかい光が、遙かに望む天の鏡面から干潟に降り注いでいたのです。

しばらくの間、その月にひきこまれていると、周りの人々がざわつと小さな声を上げたので、僕は首を戻しました。始めは何かわからませんでしたが、紺色の切子(きりこ)ガラスのような海の方をじつと見るうちに、僕は「それ」に気づきました。

さわさわとゆれる海の向こうから、何かきらきらした物がやって来っていました。海と、そして空から。それがとてもない数なのは、僕にもわかりました。上等な宝石を飾ったような星空もその光に紛れてしまい、水平線に天の川ができたようでした。そして驚く事に、





海の光は海岸線を越えて、干潟に入つても進み続けたのです。

僕が息を呑むうちに海と空の光はどんどん近づき、僕はその正体に気づいて啞然としました。

空の光の正体は、鳥でした。何千という鳥たちが、蒼白く体を発光させながら、ゆつたりと翼を上下させていたのです。先頭を行くのはシギでした。大きな体で夜の闇を貫き、染み一つなきそうな雪色の羽で海上の空気をたたいて進んで来ました。

そして海の光の正体は魚でした。そしてその他の小さな生物達でした。魚は海を越えても、蒼白い光に守られるように干潟の上を泳いで來たのです。

「なに、あれ？」

ぼくはアサリさんにしがみつき、恐る恐る聞きました。アサリさんはそんな僕の頭をポンポンと軽く叩きました。

「心配しなくともいいよ。あれはみんな帰ってきたんだから」

「かえってきた？」

僕はアサリさんの袖を握ったまま、そつと鳥たちの方を窺(うかが)いました。

あつ！と僕ののどから声が出ました。干潟の中程まで進んできた

鳥たちが、先頭からその場でいきなり急降下を始めたのです。

ぶつかる！と思った瞬間、鳥はパリンッと碎けるように、その場で蒼白い光を放つ無数の砂粒のようになり、干潟へと溶け込んでしまいました。そしてその後の鳥や魚たちも、続いて光のかけらになりました。

その様子を、周りの人々は両手を組み合わせて静かに見守っていました。

「帰ってきたんだよ。みんな」

目と口を真ん丸にしている僕に、再びアサリさんが言いました。

「あれはみんな、この海や干潟で育つて、亡くなつていった者たちの魂なんだよ」

黒々と広がる干潟を埋め尽くすように蒼白い光が舞い、小さなダイヤの砂へと碎け、魂が溶け込みます。光は銀の軌跡で細かな模様を描(えが)き出し、声のごとくに地表を駆け巡り、まるで頭上でささやく星空が降りてきたようでした。

「なんで……みんな消えちやうの？」

「いや、消えるわけじやないよ。帰ってきて、そして……ほら、みてござらん」





アサリさんが指さす方を見ると、鳥や魚の急降下も終わり、再び夜の静けさを取り戻し始めた干潟のあちこちに、ぽつと蒼白くゆれる、ちいさな炎のような物が現れていきました。

「あれ、なに?」と聞くと、「行ってみようか」とアサリさんに手を引かれました。吹き上げた一陣の潮風が、僕の髪を撫でていきました。

「あ……」

ゆっくりとその炎の一つに近づくと、その火影(ほかげ)の中に、小さな小さな女の子が座っているのがわかりました。真っ白な服に茶色の髪の毛、黒くて真ん丸な目をぱちくりさせています。

「この子は?」

僕の間に、アサリさんが優しく笑いました。

「新しいのちだよ。この子はシロチドリだね。……干潟に帰つて

きた魂は、こうして新しいのちを生むんだよ」

女の子の真っ黒な目を覗き込むと、その子はにつこりと笑いました。

「新しいのち……」

「そう。今日はね、秋の大潮の日はね、今まで生きてきた人たち



賢治のまちから 高校生☆童話大賞

に感謝をして、新しいいのちが生まれるのを祝うお祭りの日なんだよ。干潟にはとてもたくさんいのちが生きているんだ。……あんた、まだ干潟が汚いって思うかい？」

からかうようにアサリさんに言われて、僕はなんだか恥ずかしくて、首を横に振ることしかできませんでした。アサリさんは笑つて、それから少し考えてから僕の方を見ました。

「そうか……。祭りの日だからかね……。よかつたねえ、あんた。いのちは大事にするんだよ」

僕にはアサリさんの言葉の意味がわからず、きょとんとしていました。

した。

そこに、子供達が走つてきました。「お兄ちゃん、またダンスが始まよ！おどろう！」子供達は息を弾ませています。

「うんっ！」

僕は力強く頷くと、引いては寄せる穏やかな波と、白金に輝く月を背に、新しいのちを迎える歌声が再び響き始めた光の方へと、勢いよく駆けて行きました。

……ざあん…… ざざざあんつ…… ざあん……



賢治のまちから 高校生☆童話大賞

次の日の朝、僕は波打ち際に倒れているところを発見されました。

前の日、僕は海に落ちてしまい、まず助からないだろうと言われていたらしいのです。生きているなんて奇跡だと言わされました。

そう、奇跡だったのです。きっと優しい魂たちが、祭りの歌声といつしょに僕をすくいあげてくれたのでしょう。

朝の干潟は、白い波頭の下で、遅い眠りについたようでした。

.....

——あれから、長い年月が過ぎ、僕も大人になりました。

僕の耳にはもう、潮騒の子守唄は聞こえません。

僕の目の前にはもう、あの干潟はありません。

それでもあの魂たちは、あのいのちたちは、きっと故郷を探しつづけるのでしょうか。

僕は、そう、思うのです——

『干潟の夜に』

選考委員コメント

小野寺悦子

入口こそ少しもたつくものの全体は丁寧で適確な文章がすばらしく、読んでいる間中やさしい海の音に慰め励まされるようでした。干潟という意外な場所の設定や不思議なお話にも興味をそぞられました。

柏葉幸子

文章力が群をぬいており、魂がかえつてくるシーンは、力強く、美しかった。ただ、前半、擬人化した干潟の生き物たちの描写がわかりづらいので、もう少していねいに。

牛崎敏哉

どこかしら「銀河鉄道の夜」と通底する雰囲気をもちながら、内容はオリジナリティあふれる幻想的な作品。大大潮の夜、波の音がくりかえし聞こえる干潟を舞台に、空と海に無数に浮かぶ蒼白い光のおりなすシーンを、豊かなイメージ表現で描ききっているのは実に見事です。それがきれいごとで終わらないのは、最後の大人になつた僕の独白にみられる、重い現実認識で裏打ちされているからだといえるでしょう。

澤藤 稔

海の生き物たちのそれぞれの特徴をとらえた描写がすぐれている。作品全体が幻想的で美しい。とりわけ、大大潮の夜に何千という鳥たちの魂が干潟に帰つてくる情景には圧倒される。魂が新しい生命に生まれ変わるさまは、擬人化された表現だが、初々しさがよく出ている。「僕」が海に落ち干潟に倒れていたという部分の描写は、なるべく説明的にならないようにしてほしい。



賢治のまちから 高校生★童話大賞